

社会性の発達に遅れをもつ子への支援 —TOM心の理論課題を用いた試み—

○柿沼美紀・紺野道子*・杉山濱子**・船津久子***・黛雅子*

(日本獣医畜産大学・*白百合女子大学・**沼津市子育て支援課・***沼津市立金岡保育所)

はじめに

社会性の発達に偏りや遅れるが見られる子どもの中には、友達とうまく遊べない、集団になじめないなど、日常生活に問題を持つ子どもが含まれている。こういった社会性の問題は、ことばの発達や運動発達とは異なり保護者や保育者が気づきにくいこともあり、発見が遅れることも少なくない。また、目立った発達の遅れがないため、やる気がない、わざと困らせているなどと誤解されることもある。

心の理論に見られる社会性の能力は、4歳前後に子どもが獲得するものである。これは相手の立場に立って論理的に状況を判断する能力や子どもが集団の一員として必要不可欠な能力である。この能力が年齢相応に発達しない場合、子どもは集団生活の中でトラブルを起こしやすい傾向がある。

この社会性の能力の発達を早期に確認するために、白百合女子大学発達臨床センターでは、「TOM心の理論課題検査」を開発した(森永他 2003)。このテストは保育者など子どもと接することの多い職種の人が実施できるようになっている。所要時間は10分前後で、子どもに負担をかけずに行うことができる。内容も人形やおもちゃの家が用いられ、楽しみながら子どもの社会性の発達が確認できる。

沼津市では、保育者に対して心の理論などの幼児の社会性の発達に関する研修を実施し、社会性の発達に対する理解度を深めるとともに、検査方法の指導も行ってきた。また問題が見られる事例に関しては担当の保育士とケースカンファレンスを重ねてきた。

このような保育士を対象とした研修は、心の理論の発達の遅れによる二次的な問題の軽減に必要不可欠である。また、近年小学校で問題になっているLD(学習障害)や広汎性発達障害などの発達障害児もこの検査を用いることで早期に発見することが可能になる。そこで、今回は「TOM心の理論課題検査」を用いた保育士対象の研修を通して明らかになった、保育現場

で問題になる子どものタイプと、現場が求めるコンサルテーションについて報告する。

TOM心の理論課題検査

心の理論はPremack & Woodruff (1978)による、チンパンジーは心の理論をもっているかという実験から始まったものである。霊長類が生得的にもっていると考えられていた心の理論は、Baron-Cohen, Leslie, & Frith (1985)により自閉症の中核的障害が心の理論の障害であるという説に発展し、自閉症研究に大きな影響を与えた。その後、Perner & Wimmer (1983)は、子どもが他者の表象を理解しているかを明らかにするために誤信念の課題を考案した(マキシ課題)。Baron-Cohenら(1985)は「サリーとアン」の課題を作り、自閉症児の心の理論課題の通過率が低いことを明らかにした。一般的に心の理論は4歳前後を境に発達することが指摘されている(Wellman et al 2002)。

「TOM心の理論課題検査」は社会的認知の発達を測定する臨床的尺度として心の理論課題(誤信念課題)・表情の理解・語彙課題を組み合わせた尺度である(柿沼他 1999・紺野他 2000など)。これは、3歳から8歳の社会的認知の発達を知るためのスクリーニングテストで、人(他者)の意図・思考などの「心(mind)」の動きをどのように理解しているかを、発達的に見るものである。この検査は、保育・教育現場でスクリーニングとして用いられるように作成されており、社会性の発達が年齢相応であるか、再検査が必要であるか、発達相談を受診すべきかといったことが、結果から導きだされるようになっている。

目的

保育現場で保育者が何かおかしいと感じながらも子どもの抱える問題を的確に把握できない事例の中には、社会性の発達に問題を抱えた子どもが含まれている。今回はそういった子どもの早期発見とその後の日常生活

活における対応方法のあり方について、検討する。

方法

対象：沼津市立保育所所属の保育士

期間：平成12年度より15年度。計11回（幹部対象の全日講習会2回を含む）

手続き：心の理論に関する講義、課題の説明、結果の解釈、ケースカンファレンス。全日講習では実施方法、記録のまとめに関する指導も実施。

ケースカンファレンスでは集団になじめない子どもの結果と日常の様子を参考に、根底にある問題について検討。また保育現場における対応方法について指導。

結果と考察

保育者は日常の保育の中で、ある子どもについて何かおかしいと感じながらも、言語や運動発達が年齢相応であるために、子どもの抱える社会性の発達の問題を的確に把握できていない場合が見られた。また、遅れは認識しつつも子どもへの接し方、親へのアドバイスの方法に迷いを感じている事例もしばしば見られた。

研修を通して、保育者が保育所の中で気づいている気になる子どもについての情報や TOM 心の理論課題検査による評価の結果について、検討を行ったところ保育者が問題があると感じる子どもは1) 全体の発達がゆっくりのタイプ、2) 発達にアンバランスのあるタイプ、3) 発達には問題はないが情緒の問題のあるタイプに分けられた。

タイプ1) には、軽度の遅れの子どもが含まれていた。ことばの理解や運動能力など全体的に発達が遅めのため、保育士はさほど子どもへの対応にとまどいを感じていないようだった。ただし中には、おとなしいため、全体的な遅れに気がつかない場合もあった。このタイプの子どもには精神年齢及び社会性の発達年齢に応じた対応が求められる。

一方、タイプ2) の場合、発話も見られ、運動にも目立った問題がないため、意図的にトラブルを起こしていると誤解されることがある。このタイプの子どもの発話は、実際にはしばしば一方的で状況そぐわないが、語彙が豊富なため周囲がそれに気づかないことも

ある。このタイプの子どもに対しては、一対一の対話をする時間を持つようにし、一方通行ではない会話が成立するよう心がけることが大切である。また日常生活においても、実年齢より社会性の発達がやや送れていることを考慮した対応が必要である。

タイプ3) の場合は、全体的な発達も社会性の発達も年齢相応であるにもかかわらず集団行動がとれない場合であり、家庭での問題などがトラブルの原因となっていることがある。状況の理解はできているので、どんなことをすれば保育士が困るかもわかった上で、わざと問題を起す場合もある。このタイプの子どもには、環境要因も含め、子どもの抱えている問題を理解し、対応することが必要であろう。

検査結果やケースカンファレンスで問題があることが分かった後、次に保育者が求めるのは日常生活での具体的な対応方法である。基本的には子どもの社会性の発達相当年齢を理解し、それにあわせた対応が求められる。実年齢が6歳であっても社会性の発達が4歳レベルであれば、ルールの説明、一緒に読む本などは4歳児レベルで対応する必要がある。また、社会性の発達を促すためには、二方通行の会話を心がけること、知識の羅列ではなく、人の心や気持ちに関する話題を取り上げること、またさまざまな感情を共感、共有することなどがあげられる。

まとめ

社会性の発達は、ことばの発達、運動発達などと比べて一見分かりにくい。ため、保育者自身が社会性の発達の遅れを持つと思われる子どもへの接し方にとまどいを感じていることが多い。保育者が明確な判断基準を持つことで、より有効な保育が可能になると同時に、保護者へのアドバイスもより的確なものになるだろう。そして「TOM 心の理論課題」は、社会性の発達の一基準として有用であると考えられる。

保育者にとっては子どもの発達のレベルを把握することは、子どものニーズにあった的確な保育を行うために必要である。今後は心の理論に見られる社会的認知の発達に関する講習を重ねると同時に、保育士のニーズにあったコンサルテーションのあり方について検討を行うことが求められる。